

4番目の許婚候補 番外編

M a n a m i & A k i b i t o

富樫聖夜

Seiya Togashi



エタニティ文庫

目次

受け継がれていくもの

5

ガールズトーク

49

師走しわすと合コン

149

書き下ろし番外編 家族の夢

297

受け継がれていくもの

——ベッドに裸でうつぶせになった私の身体に、彰人あきひとさんの裸体が重なっている。いつものように身体を重ねた後、明日のためにもう寝たいと訴える私に、彰人さんがこう言った。

『まなみは何もせず、ただ寝ていればいい。後は俺がやるから』
そうしてうつぶせに寝かされ、後ろから挿入さしこされたのだ。

確かに私はただ寝てるだけでいいし、この体勢だといつともより挿入は浅い上に、激しく突き上げられることもない。

けれど、感じてしまうことには変わりなく、おまけに彰人さんが唇と舌を使って背中を愛撫あいぶしてくるからたまらない。

だから、そこ、弱いんだってば……！

私はシーツをぎゅつと掴つかみながら、背中を弓なりに反そらして嬌声きょうせいをあげた。

「あ、ああっ……！」

その拍子に、うなじに彰人さんの唇が触れ、私の身体がわななく。

こうなるともう、大人しく寝ているなんて無理だった。だって、彰人さんが腰を押しつけてくるたびに、背中せなかの敏感な場所にキスするたびに、私の身体はビクビクと震え、無意識に動いてしまう。もっと奥深くにある感じる所に、彰人さんを導きたくなくなってしまう。

……きつと彼は最初からそれをたくらんでいたのだろう。本当に酷ひどい人だ。

「まなみ……」

掠かすれた声が降ってくる。その色気のある艶つややかな声にも私は反応してしまう。

私の中でこのまま達したい気持ちと、眠りたい気持ちちがせめぎ合っていた。

「おね、がい。寝かせて……ああ、はあ、ん、あ」

「だめだよ、最後まで付き合って。そうしたら寝かせてあげるから」

「いや、お願い、寝かせて……」

ぐずぐずと泣き言を言いながらも、私の腰の動きは止まらない。

眠いのにな。寝たくて寝たくてたまらないのに——

「まなみ……」

「……う、ん……おねが、い……」

「まなみ、起きて」

「や……寝かせて……」

「だって、私は寝たままでもいいんでしょう？」

「まなみ」

「……」

「まなみ！」

——彰人さんの声が大きくなり、目の前が急に明るくなった。

「ぐっすり眠っているところ悪いけど、そろそろ起きた方がいい」

少し冷たい指で頬を撫でられ、私の意識はまどろみの中から浮上する。

「ん……」

ほんやりと薄目を開けたはいいいけれど、やけに眩しくて、私——上条まなみはゴロンと寝返りをうつ。その背中にまた声をかけられた。

「まなみ、起きなさい」

まだまだ眠かった私は、その声を意識の外に押しやる。けれど、いわゆる防衛本能というやつだろうか。次にかけられた言葉は、なぜかそれまでの言葉よりしつかりと耳に届く。

「起きないと手加減なしで襲うよ？」

その言葉の意味を脳が理解する前に、私はくわっと目を開けた。そして慌てて上半身を起こしながら言う。

「たった今起きました……！」

「そう。おはよう、まなみ」

目の前で私の恋人兼婚約者——佐伯彰人さんが、にっこりと笑みを浮かべていた。

「お、おはようございます。か……彰人さん」

とっさに課長と言いかけた私は、慌てて取り繕う。彰人さんはもちろんそれに気付いて眉を上げてみせたけど、どうやらお咎めはないようだ。

「ギリギリセーフといったところかな。まあ、今日は時間があまりないからね」

「時間……」

私はハッととして、ヘッドボードに置いてある目覚まし時計を確認する。

「ヤバイ。もうこんな時間……！」

デジタルの表示時刻を目にして仰天した私は、慌ててベッドから出て、きちんと折りたたんだ状態で置いてある自分の服のもとへ急いだ。

「実家に泊まっている日曜日の朝はいつもゆっくり起きてたから！ ああああ、彰人さんも、もうちょっと早く起こしてくれればいいのに！」

私は素早く服を着ながら、ぶつぶつ文句を言う。すると彰人さんは目を細めて笑った。

「いや、気持ちよさそうに寝ていたから、ギリギリまで寝かせてあげようかなと思って」
 「それはありがたいですけど、今日だけは遠慮なくたたき起こしてくれてよかったの
 について思います！」

私は服を着終えると、バッグを手に彰人さんを振り返った。彰人さんは藍色のサマー
 スーツに身を包んで、いつでも出かけられる姿になっている。

「私、自分の部屋に戻って急いで仕度してきますね。ちょっと待っててください、彰人
 さん」

「まだ時間はあるから焦ることはないよ。お祖母さんには昼過ぎに行くって言っただけ
 で、何時までに行くと具体的に伝えたわけじゃないから」

「で、でも、早めにマンションを出て、どこかでお昼をゆつくり食べてから行くはずだっ
 たのに、もう正午近いですよ。今から仕度してご飯を食べたら、佐伯邸に着くのが遅く
 なっちゃいます」

私がそう言うと、彰人さんは優しく微笑んだ。

「大丈夫だよ。多少遅れても構わないさ」

「と、とにかく、急いで仕度してきますね！」

「慌てなくていいからね」

そんな言葉を背に、私は寢室を飛び出し玄関に向かった。

すぐにやってきたエレベーターに乗って、六階にある自分の部屋を目指しながら、ハ
 アとため息をつく。

ちゃんと起きられなかった私が悪いんだけど、幸先が悪いといふかなんというか……
 ううう。

実は今日、私と彰人さんは退院した美代子おばあちゃん——彰人さんのお祖母さんの
 お見舞いに行く予定なのだ。そのため、いつも日曜日には実家に帰省している私だけ
 ど、今週末は彰人さんの部屋に泊まっていた。

昨日の土曜日は一日中彰人さんと二人で過ごし、そのまま彼の部屋に泊まった——の
 はいいけれど、彰人さんの寢室で寝てもされないわけがない。例によって襲われてし
 まい、ぐったり疲れたまま眠りについたのが、運の尽きだった。

目覚ましはセットしておいたけど、ちゃんとその時間に起きられたのは彰人さんだけ
 で、私はどうやらぐっすり眠り込んでしまっていたみたい。そのわりには夢見が悪かつ
 たような気がするけど。

こんなにバタバタじゃなくて、もっとゆつくり仕度したかった……

実は彰人さんと婚約してから佐伯邸を訪れるのは、これが初めてなのだ。もちろん過
 去には何度も訪れたし、去年だって縁談を白紙に戻すようお願いするために邪魔した。
 でも、それはあくまで眞子お祖母ちゃんの孫としての訪問だ。

でも今回は違う。私は彰人さんの婚約者として佐伯邸に向かう。いわば、恋人の家族に結婚のご挨拶をするためにお宅へ伺うようなものなのだ。

だから、私はどうしても念入りに仕度して行きたかったのに……

「うまく行かないものだなあ」

私は再びため息を漏らしながら、左手の薬指に嵌まっている婚約指輪に視線を落とした。キラキラ輝く大きなダイヤモンドがついた、いかにも高そうな指輪だ。

……彰人さんに素性がバレてから三ヶ月も経つのに、まだちょっと信じられないでいたりする。私が彰人さんと婚約したことを。舞ちゃんたち従姉妹を差し置いて自分が許婚になったことを。

今にも目が覚めて、全部夢だったなんてことになるんじゃないかって、実は少しだけ思っている。婚約してからも色々あって、しんどい思いだっただけなのに。

夜中、ふと真つ暗闇の中で目を覚まし、この幸せな思いも記憶も現実じゃないのかも……そう思ってしまうことが何度もあった。

未だに彰人さんを名前で呼ぶべき場面で、つい課長って呼んでしまうのも、そのせいなのかもしれない。

だって二年以上もの間、私は自分が四番目の許婚候補だと、彼との縁談は私には関係ない話だと、思い込んできたんだよ？

大学卒業間際に降って湧いた、三条家と佐伯家の縁談。その筆頭候補に挙げられていたのは従姉の舞ちゃんだ。私はいくら名門である三条家の血を引いてるといっても外孫だし、従姉妹たちと違ってお嬢様じゃない。だから、四番目の——最後の許婚候補だとばかり思っていたのだ。

それが就職してみたら、その会社に佐伯家の御曹司である彰人さんが素性を隠して勤めていて、上司と部下という間柄になってしまった。それだけじゃなくて、一緒に働いている間に少しずつ距離が縮まって、気付いたら恋人同士になっていた。

だけど私は自分が三条家の外孫で、彰人さんが嫌がっていた縁談のお相手候補だとは言い出せず、秘密を抱えたまま付き合っていたのだ。

ひょんなことから素性がバレて、親公認の許婚という間柄になった今もそれを信じきれないのは、どこか後れしている部分があるからなのだろう。

何しろ相手は巨大企業を経営する佐伯家の御曹司。私だって佐伯家と肩を並べる名家、三条家の親戚だといえ、うちは一般家庭に過ぎないのだ。

……そのくせ、なまじ三条家や佐伯家が属しているハイソな世界に片足だけ突っ込んでいる状態だから、そこがどんなに大変な世界か知っている。

何も知らなければ、それこそ気軽に飛び込んでいたかもしれないのに……
要するに、覚悟が足りなくて何もかも中途半端なのだ、私は。

「覚悟なんて……そう簡単にできれば苦勞ないよねえ」
 ため息まじりにつぶやいていると、エレベーターが停まった。扉が開くと同時に、私は早足で部屋へ向かう。

とにかく、今は目の前のことだけを考えよう。どうせこればかりは、すぐに解決できないと分かっている。そんなに簡単に解決できるようなことだったら、十年前、あんなに傷つかずに済んだのだから。

私は頭を切り替え、出かける仕度のことだけを考えるようにした。

急いで仕度を整え、お昼をファミレスで手早く済ませた私たちは、なんとか予定通りの時間に佐伯邸にたどり着くことができた。

「まあ、まあ、まなみちゃん、いらつしやい！」

「こんにちは、美代子おばあちゃん」

守衛の人から連絡をもらったのだろう。玄関ホールに着くと、美代子おばあちゃんがそこで待っていてくれた。

「美代子おばあちゃん、具合はどう？」

私は美代子おばあちゃんを上から下まで眺めながら尋ねる。

大丈夫だからこそ退院できたのだと分かっているけど、つい心配してしまうのは、

美代子おばあちゃんの容態が一時はすごく危なかったからだ。

手術予定日を迎える前に容態が悪化したため、緊急手術となってしまった。あの時は彰人さんと二人で万が一のことを覚悟したくらいだ。

幸いお医者さんの腕がよかったのか、手術は無事に成功した。手術の間、体力が持つかどうか不安だったけど、おばあちゃんは持ちこたえた。

『まなみちゃんと彰人さんの結婚式を見届けてからこっちに来いっていう、主人と眞子ちゃんからのお達しなのかもしれないわね』

手術後、集中治療室で目を覚ました美代子おばあちゃんは、駆けつけた私と彰人さんの顔を見てそう言った。

私は安堵のあまり泣き出し、彰人さんはそんな私を慰めるのに忙しくて、美代子おばあちゃんそつちのけになってしまったことは記憶に新しい。

あの後、美代子おばあちゃんは順調に回復し、今は自宅で療養している。

本当はもっと早くお見舞いに来たかったけど、会社が決算月ということもあって、私とはともかく彰人さんがすごく忙しかったのだ。その忙しさが落ち着いた今週、ようやくお見舞いに来れたのである。

「術後の経過はいいし、リハビリも順調よ。まなみちゃんには心配かけたけど、もう大丈夫」

おばあちゃんはそう言った後、悪戯いたずらっぽく笑った。

「実はね、今お客様がいらしてるのよ」

「えっ？　じゃあ、私たちはお邪魔なんじゃ……」

何しろ彰人さんはおばあちゃんにとつて身内なのだから、お客様の方を優先するのは当たり前だ。

「いいの、まなみちゃん。邪魔だなんてことは絶対ないから、ぜひ一緒に来てちょうだい」

美代子おばあちゃんがなんだかすごく楽しそうで、それでいて何かたくらんでいるような気もして、私と彰人さんは顔を見合わせる。

誰だろう？　思いつくのは三条家の誰かなんだけど……

美代子おばあちゃんの後について応接室に向かいながら、私はアレコレ予想していたけれど、そこにいたのは予想外の人だった。

「あら、まなみじゃないの」

「すごい偶然だね」

私は言葉もなくその場に立ちつくし、それから叫んだ。

「お、お父さん!?　お母さん!?!」

そう、そこにいたのは私の両親だったのだ……!

ソファに二人並んで座り、こちらを向いてにこにこ笑っている。

「え？　なんで？」

二人も今日お見舞いに来る予定だったなんて、私は聞いてない。まあ、それを言ったら私の方だって何も言わなかったけど。

「まなみが今日はおうちに来ないって言うから、ちょうど時間も空いていたし、お見舞いに行こうかって話になったの。まさか、まなみたちも来るとは思わなかったし」

「そ、そう……」

こんな偶然あるんだ……と聞いていたら、彰人さんがふうとため息をつきながら、美代子おばあちゃんに言った。

「お祖母さん。知っていて、わざとぶつけましたね？」

私は、あつと思った。私とお母さんたちがお互いの予定を知らなくても、当然、美代子おばあちゃんは知っていたわけで……。きつと、わざと私たちが来る時間帯を見計らって、お母さんたちに時間を指定したに違いない。

美代子おばあちゃんは、あつけらかんと笑った。

「だって彰人さんったら、まだ二人に挨拶もしてないって言うじゃない？　これは私が

一肌脱がないと思ってる！」

挨拶というのは、私の両親と彰人さんの顔合わせのことだろう。

でも、それは美代子おばあちゃんの手術のことがあってバタバタしていたし、その後は決算期に入って彰人さんだけじゃなくうちのお父さんも週末返上で仕事をしていただけ、都合がつかなかっただけなのだ。

私はそう言おうとした。けれどその前に、お母さんが口を開く。

「それは私たちが、おばさまの手術のことが一段落してからにしましよって言ったからなのよ。その後もうちの人の仕事が忙しくて都合がつかなかっただけ」

「そうですね、美代子おばさん。彼のせいじゃありません」

お父さんも彰人さんをやんわりとフォローする。それでも美代子おばあちゃんは不満顔だった。

そんな美代子おばあちゃんに呆れたように、彰人さんは片眉を上げていた。そして、不意に一歩前に出て、お父さんたちに軽く頭を下げる。

「お久しぶりです。ご挨拶が遅れて申し訳ありません。今日はわざわざ祖母のお見舞いにお越しいただき、まことにありがとうございます」

顔を上げた彰人さんに、お父さんが親しみのこもった笑みを向ける。

「うん、久しぶりだね」

そう、お父さんと彰人さんは面識がある。私が実家から今のマンションに引っ越す時に、彰人さんが職場のみんなと一緒に手伝いに来てくれたからだ。その時、妙に和気あ

いあいと会話をしていた二人の姿は記憶に新しい。

たった半年前のことだけど、あれから色々あって……まさか彰人さんこうして恋人同士になったり、婚約したりするとは夢にも思っていなかった。

「私のことは覚えてるかしら、彰人君？」

お母さんが身を乗り出して、微笑みながら尋ねる。

「あなたが小さい頃に会ったきりだけど、お話ししたこともあるのよ？」

それを聞いて、彰人さんの顔に微笑が浮かんだ。

「もちろん覚えてますよ、お久しぶりです。確か……祖母に連れられて三条邸に行った時にお会いしましたよね？」

それを聞いて、お母さんは破顔した。

「まあ、よく覚えてるわね！ そうよ、その時に会ったの。ついでに言うと、あの時あなたが子守をしてくれたのは、うちの娘よ」

いきなり指を差されて私は面食らった。

「は？」

「やっぱりそうでしたか」

彰人さんの顔に苦笑が浮かぶ。

「そうじゃないかなとは思っていたんですが、何しろみんな似たような名前なので、あ

まり自信がなかったんですよ」

「は？」

彰人さんが何を言っているのかさっぱり分からない私は、みんなの顔を見回しながら首を捻る。美代子おばあちゃんはこのこ笑っているし、お父さんも笑みを浮かべているから、意味が分からないのは私だけのようだ。

「そうよね、みんな『ま』から始まる名前ですものね」

お母さんはクスクス笑った後、話が見えなくて一人顔をしかめている私にこう言った。「あのね、彰人君がまだ小さい頃、おばさまに連れられて三条邸に来たことがあるの。その時に、あなたは彰人君と出会っているのよ」

「え？」

私と彰人さんが三条邸で出会っている……？

「もつとも、あなたがまだ赤ん坊の時の話だけだ」

「赤ん坊……」

なるほど、それは覚えていないわけだ。

お母さんはその時のことを思い出したのか、またクスクス笑っている。

「おばさまやうちの母には、透君と彰人君を仲良くさせたいっていう思惑があったみたい。でも初対面の子どもを二人きりにしてもどうなのかってことで、まなみを連れてく

るように言われたの。瀬尾のお姉さん夫婦のところの真綾ちゃんまで呼ばれて、小さい子たちの世話を透君と彰人君の二人に押し付けたのよ。そうしたら、きつと協力して面倒を見てくれると思って」

「そ、それは……」

従兄の透兄さんと彰人さんは似たような経歴を持ちながら、まるで水と油みたいな関係だ。お互いを認めているくせに、相手をよく思っていない。いくら小さかったからって、この二人が仲良くなれたとは思えなかった。

彰人さんが苦笑していることからしても、その結果は思わしくなかったに違いない。案の定、お母さんはこう言った。

「まあ、全然仲良くなれなかったんだよね。でも、その時に彰人君が主に面倒を見てくれたのがあなたなのよ、まなみ。目を覚ましたあなたを、あやして寝かしつけてくれたの。今から思うと、あの時が初対面じゃないかしら？」

「……全然覚えてない」

初対面は十年前のパーティーの時だと思っていたけれど、本当はもつと前に出会っていたなんて。

「まなみはまだ小さかったからね」

そう言って、彰人さんが私の頭を撫でる。

覚えてないから現実味がないし、正直本当なの？　って感じだけど、私がこの話を聞いて少しホッとしたのは事実だ。

だって彰人さんとの初対面が、パーティーであのおばさんに泣かされた時だっというの、あまり嬉しくない。あの出来事は彰人さんとの大事な繋がりだし、共通の記憶だっというのも確かだけど、あれが初対面じゃなければよかったのにつて、ちよっと思つていたのだ。

「そっかあ。もつと小さい時に会つていたんですね、私たち。……よかった」
私は思わず笑顔になった。すると彰人さんも笑顔になる。

「そうだね」
そんな私たちを他の三人が微笑ましげに見つめていた。

* * *

お手伝いさんが、私と彰人さんのためにお茶とお菓子を持ってきてくれたので、私たちはお母さんたちの横のソファに並んで腰を下ろした。

そのまま五人で雑談をする。内容は昔の話をはじめとして、最近の経済の話とか、会社での仕事の話とかだ。まあ、仕事の話は主にお父さんと彰人さんの間で交わされてる

んだけど。

そうして、最初に運んでもらったコーヒーがすっかりぬるくなった頃。美代子おばあちゃんが、いきなり胸の前で両手をパンと合わせた。

「そうだわ。まなみちゃんに見せたいものがあるの！」
「え？」

「次にまなみちゃんがこの家に来たら、絶対に見せようと思つていたのよ。それを果たさないと死んでも死に切れないわ」

そう言つて立ち上がった美代子おばあちゃんに、私は目を丸くする。

「美代子おばあちゃん？」
「美代子おばさま？」

私と同じく怪訝そうに尋ねたお母さんに、美代子おばあちゃんはにっこり笑つて答えた。

「七緒さんのベールよ」

七緒さんというのは、彰人さんの亡くなったお母さんの名前だ。

その言葉を聞いて、お母さんはなんのことだかすぐに分かつたらしい。合点がいったという顔で頷く。

「ああ、なるほど。七緒さんのベールね」

それからお母さんは私の方に振り向き、につこり笑いながら促す。

「まなみ、行ってらっしゃい」

「え？ え？」

お母さんにまでそう言われて、私は面食らった。

「彰人さん、まなみちゃんを借りるわよ」

「……仕方ないですね」

彰人さんがため息まじりにつぶやく。彼もなんのことだか分かっているらしい。

私は「？」マークを頭の周りに飛ばしながらも、おばあちゃんに連れられて応接室を出た。

おばあちゃんが案内してくれたのは、今まで入ったことのない部屋だった。他の部屋に比べると、それほど大きくない。もちろん、それでも私のマンションの部屋に比べたら大きいけど。

広さは十畳くらいだろうか。ガラス戸の棚には小物類が置かれ、本棚にはかなり古そうな装丁の本が収められている。よく見ると「手作りのウエディングドレス」とか「ウエディングドレス特集号」とか、ウエディングドレスに関する書籍や雑誌が集められているようだ。

白いウエディングドレスを着た人形まで飾られているそこは、全体的に柔らかな雰囲気があり、女性の部屋だというのが分かる。

その中でも一番目を引いたのは、部屋の隅に鎮座する、大きな業務用の足踏みミシンだった。

私が珍しく思っただけだと、おばあちゃんが懐かしそうに目を細めて言った。

「ここはね、彰人さんの母親である、七緒さんの仕事部屋だったの。彼女、ウエディングドレスのデザイナーだったから」

「へえ、ウエディングドレスのデザイナー……」

そこまで言っただけで、私はキョトンとした顔でおばあちゃんを見返す。

「彰人さんのお母さんって、お仕事をされていたんですか？」

彰人さんのお母さんは、どこかの名家のお嬢様だったと前に聞いたことがある。今でこそ真綾ちゃんや舞ちゃんみたいなお嬢様でも社会に出て働いているけど、その当時はお嬢様と呼ばれるような人が働くなんて、けっこう珍しかったんじゃないだろうか？ しかも、佐伯グループの跡取りに嫁いだ身で。

「働いていたのは結婚するまでだけだね。七緒さんの実家の会社は今でこそ大きくなっただけで、元は小さな会社だったの。だから、七緒さんには自分がお嬢様だという意識はなかったと思うわ。デザイナーの卵として将来を嘱望されていたのだけれど、雅人と

出会ってね。佐伯家に嫁ぐのならば、彼女には仕事はやめてもらわざるを得なかったの」
「……でしようね」

なんとなく身につまされる話だ。私だってもし佐伯家に嫁入りするのなら、仕事はやめなきゃいけないだろうから。

「ただ、趣味としては続けたいからって言ってね。人形用のドレスを作ったり、知り合いから依頼を受けてドレスを手作りしたりしていたの。まあ、それも彰人さんを妊娠したことで中断してしまっただけだ」

美代子おばあちゃんは本棚から一冊のスケッチブックを取り出し、私に手渡した。

「これは七緒さんのデザイン画よ」

二十五年以上もの時を経たスケッチブックは黄ばんでいたけれど、中に描かれたデザイン画の線はくつきりしている。

「わあ……！」

そのスケッチブックには、空白のページは一枚もなかった。全てのページにドレスを着た女性やベールを被った女性の絵が鉛筆で描かれている。前から見た図、後ろから見た図、横から見た図が、一ページの中にぎっしり描き込まれていた。

デザインは、今見ると少し古いかもしれない。でも、当時は肌をあまり露出しない長袖やハインネックのものが主流だったはずなのに、このスケッチブックにはフレンチ袖の

ドレスや大きく胸元が開いたドレスも描かれていた。

「すごく素敵です」

「私もそう思うわ。七緒さんは才能があったから、佐伯家に嫁がなければ、デザイナーとして一流になれたかもしれないわね。運命が少しでも違っていたら……」

おばあちゃんは顔を曇らせた。

「それでも、病に倒れてしまうのは同じだったのかしら……」

「美代子おばあちゃん……」

彰人さんのお母さんは、彼が三歳の時に病気で亡くなったという。物心つく前だったからあまり覚えていないのだと、いつだか彰人さんが言っていた。

美代子おばあちゃんは悲しみを振り払うかのように頭を振ると、今度はガラス戸のついた棚の方に向かう。

「まなみちゃんに見せたいのは、これなの」

そう言って取り出したのは、綺麗な丸い箱に入った白いベールだった。白いバラのモチーフがいくつかついただけの、とてもシンプルなベールだ。

「これは？」

「病気になるた七緒さんが最後の力を振り絞って作った、彰人さんの未来の花嫁のためのベールよ」

「え？」
私は弾かれたように顔を上げた。美代子おばあちゃんはそんな私に、悲しみと懐かしさの入り混じった笑みを向ける。

「七緒さんはね、産まれる子が男の子だったら、その子がお嫁さんをもらう時には絶対に自分がウエディングドレスを作るって言ったの。そして女の子だったら、その子がお嫁に行く時にはドレスを二人で一緒に作るんだって。だけど病気になるって、結婚式どころか彰人さんの成長を見守ることすらできないと悟った彼女は、最後の力を振り絞ってこのベールをこしらえたの。彰人さんの未来の花嫁のために」

そう言って、美代子おばあちゃんはそっとベールを撫でた。

「七緒さんはウエディングドレスのデザインが時代によって大きく変われることを、誰よりもよく分かっていた。だからドレスに比べればそれほど変わることがない、ベールを作ったの。できるだけ飾りはシンプルにして、その時代時代のドレスに合わせてリフォームできるようにと」

私は次に言われるだろうことを、なんとなく察した。

美代子おばあちゃんは顔を上げて、私をまっすぐに見る。

「これをね、まなみちゃんに受け取って欲しいの」

「美代子おばあちゃん……」

「使ってくれとは言わないわ。ドレスのデザインに合うかどうか分からないもの。ただ、これは七緒さんの心そのものだから、彰人さんの婚約者であるまなみちゃんに受け取って欲しいの」

私の目に涙が滲んだ。たった三歳の息子を残して逝かなければならなかった七緒さんの気持ちを思い、そしてその形見を私に託そうとする美代子おばあちゃんの気持ちを思っ

嬉しい。すごく嬉しい。……だけど、本当に私がもらっていいの？ っていう気持ちが浮かんでくる。

ここは喜んで受け取るべき場面だって、分かっているのに。どうしても、どうしても不安が拭えない。

私はドレスを見つめ、それから美代子おばあちゃんを見上げて、震える唇を開いた。

「……美代子おばあちゃん、嬉しい。すごく嬉しい。けれど、本当にこれ、私が受け取っていいのかな？ そんな資格があるのかな？」

「まなみちゃん？」

「彰人さんと結婚するのが、本当に私でいいの？ こんな私でいいの？ 私、いつも彰人さんにおんぶに抱っこで、みんなに守られてばかりで、自分では何一つできないのに……」

言いながら、涙が出てくる。

「こんな私が佐伯家に入って、彰人さんを支えることなんてできるの……?」
自信なんて少しもない。家柄だけじゃなく、彰人さんの隣に立つのに相應ふさわしい能力がないのも分かっている。たとえ三条家の後ろ盾があったとしても、人から何か言われるのは目に見えていた。

秘書課の日向ひなたさんの事件の時だって、結局私は何もできず、みんなに守られるだけだった。一人でなんとかしようとしても、全然ダメだった。

……こんな私が佐伯家に入って、まともにやれるとは思えない。

ポロポロと涙を流す私に、美代子おばあちゃんは優しく言った。

「誰も自信なんてないのよ、まなみちゃん。私だってそうだったし、七緒さんだってそうよ。今のまなみちゃんと同じようなことに悩んでいたの。佐伯家に入る資格なんかなくて。でもね、まなみちゃん。心配しないで。私がまなみちゃんに望むのはたった一つ。彰人さんの傍そばに寄り添ってくれることだけ」

「……だけど、彰人さんやみんなに守られるだけじゃ……」

美代子おばあちゃんは手を伸ばして、私の頭をそつと撫なでた。

「ねえ、まなみちゃん。守られることのどこが悪いの？ 守ってもらえるということは、本当はすごいことなのよ?」

「え?」

驚いて顔を上げると、美代子おばあちゃんがこにこ笑っていた。

「みんなにとつて、まなみちゃんがそれだけ大切だから、守ろうとしてくれるのでしょう? 愛されているのよ。守るだけの価値があると思われているのよ。それはまなみちゃんが持っている大きな武器の一つだけ」

「ぶ、武器?」

「そう」

美代子おばあちゃんは大きく頷うなずいた。

「あのね、この歳になるとよく分かるのよ。自分一人でもできる人間なんかいないって。多かれ少なかれ、必ず誰かの助けを借りているものなの。誰かに支えられているものなの。それを忘れて、一人で生きていける、大丈夫だなんて思う人がいたとしたら、それはただの独りよがりに過ぎないわ」

私は大きく目を見開く。

「そんな独りよがりな人間を、誰が助けたと思うかしら? みんなに守られる、必要な時に助けてもらえるっていうことは、あなたが普段から周りの人に、感謝の気持ちを持って接しているからでしょう? だから助けてもらえる。守ってもらえる。それはあなただけが持っている武器よ」

「……そんなこと、考えたこともなかった……」
私は呆然としてつぶやいた。

こんな頼りない私でいいの？ 彰人さんの隣にいてもいいの？

そんな私を見て、美代子おばあちゃんがふふっと笑う。

「必要な時に手を差し伸べてもらえるのも、立派な才能なのよ。だから、今のままのまなみちゃんでもいいの。そんなまなみちゃんがいつて彰人さんが言っているのだし、そこは自信を持っていいと思うわ」

「……はい」

私は頷いた。それから、白いベールを指差す。

「これ、いつか使わせてもらうね、美代子おばあちゃん。その時まで、美代子おばあちゃんに預けておいていい？」

このベール——彰人さんのお母さんの心は、彰人さんと本当に結婚する時に、美代子おばあちゃんの手から渡してもらおう。私はそう思っただけで頼んだ。

「ええ。もちろんよ」

私の言いたいことが分かったのだろう。おばあちゃんにはっこり笑って頷いた。

その後、しばらくスケッチブックを眺めたり、思い出話をしたりした後、美代子おばあちゃんが時計を見ながら言った。

「さて、そろそろ彰人さんたちのところに戻りましょうか」

ベールを再びガラス戸のついた柵にしまい、スケッチブックも本柵に戻して、私と美代子おばあちゃんは部屋を出た。

そこへお手伝いさんの一人が、電話の子機を持って、慌ててやってきた。

「奥様、直通電話に、竹嶋様からご連絡が……」

それを聞いたおばあちゃんが、「あつ」と言っただけで口元を押さえる。

「そういうえば、月末の観劇のことについて今日連絡をよこすって言っていたわね。ごめんなさい、まなみちゃん、先に戻っててくれる？」

「うん。分かった」

「ごめんなさいね」

すまなそうに微笑んで、美代子おばあちゃんはお手伝いさんから子機を受け取る。それを見てから、私は廊下を歩き始めた。

さつきは美代子おばあちゃんと一緒だったから、上の階に上がるのにはエレベーターを使った。けど、たかが二階ぶん下がるのに一人でエレベーターを使うのは、さすがに抵抗があった。

だからエレベーターを素通りして、そのまままっすぐ階段の方へ向かう。

その途中、鈴の音がチリンと響いた。

足を止めて辺りを見回す私の目に映ったのは、廊下の曲がり角から覗く、青みがかった灰色の尻尾だった。

あれは間違いなく猫の尻尾だ。

……猫？

「マーちゃん」

思わず口から出たのは、昔ここで拾った子猫の名前だ。正式な名前はマナらしいけど、美代子おばあちゃんは「マーちゃん」って呼んでいたから、私はずっとそれが名前だと思っていた。

階段の角から覗く尻尾は、確かにあのマーちゃんの尻尾に見える。あの子もあんな風に、青と灰色が混ざったような色の猫だったから。

でも、マーちゃんは何年も前に亡くなったと聞く。

新しい猫を飼ったのだろうか？

またチリンと鈴の音がして、尻尾が階段の方に消えていく。私はその姿を確かめようと、急いで階段へ向かった。

* * *

まなみと美代子が応接室を出て行き、まなみの両親と彰人の三人が残されたところで、まなみの母親の沙耶子が口を開いた。

「彰人君は七緒さんの遺した花嫁のベールについて、おばさまから聞いているのね？」すると、彰人の口元に苦笑が浮かぶ。

「ええ。祖母から耳にタコができるくらい、聞かされました。だから、二人が上でなんの話をしているかも大体想像できます。おそらく、あのベールをまなみに託すでしょう」
「そうですね」

懐かしそうに微笑んでから、沙耶子は彰人をじっと見た。

「実はね、私のウェディングドレスを作ってくれたのは、七緒さんなの」
彰人は軽く目を見張る。

「そうなんですか？ 初耳です」

「本当は結婚式は挙げないで、籍だけ入れておしまにする予定だったのだけど、お父さんたちから身内と親しい友人たちだけでも呼んで、式を挙げて欲しいって言われてね。とはいえ急に決まったから、当初はウェディングドレスを着ることは考えていなかったのだけど、七緒さんが『私が作る！』って言ってくれたの」

沙耶子はふふと笑った。

「ウェディングドレスは女性の夢なの。今着なきや一生後悔するから！」って。そし

て七緒さんが不眠不休で仕上げてくれたドレスを着て、私はこの人のところへお嫁に行つたわけ」

「すばらしいウエディングドレスだったよ」

沙耶子に指を差された隆俊も、懐かしそうに微笑んだ。

「でもね、ドレスを仕上げるのに精一杯で、ベールは間に合わなかったの。それでベールだけは、ドレスに合うものをレンタルしたのよね。だから、うちにはウエディングドレスはあるけれど、ベールはないのよ。これってすごい偶然じゃないかしら？」

そう言つて、沙耶子は微笑みながら彰人を見つめた。

目鼻立ちのくつきりした沙耶子は、まなみとあまり似ていない。まなみはどちらかというところ、隆俊似のようだ。けれど、こちらに向けられる沙耶子の眼差しの中に、最愛の女性と共通するひたむきさや無邪気さなどを見出して、彰人の心がざわめく。

多分、祖母だけではなく、この人にも一生頭が上がらないだろう、そんな予感を胸に秘めながら、彰人は微笑んだ。

「そうですね」

「あの子はどういう運命のお導きなのか、七緒さんの作ったウエディングドレスとベールを、両方身にまといつてお嫁に行くことになるようね」

「必ずしも母の作ったドレスを使う必要はないですよ。まなみが着たいと思つたウエデ

ィングドレスにすればいい」

そう言いながらも、まなみが母の作ったドレスを着ないわけがないと、彰人には分かつていた。彰人の言葉を聞いてクスツと笑つた沙耶子も、娘の性格をよく把握しているようだ。

「あの子の性格上、七緒さんのドレスを選ばないわけがないわ。もちろんそのまま使うわけにはいかないから、リフォームしてもらふことになるでしょうけど」

「でしようね」

彰人の口元に苦笑が浮かんだ。

それから彼は、その笑みをスツと消して立ち上がり、二人に頭を下げる。

「後日、改めてお願いしに伺いますが、今こどもも言わせてください。——まなみさんを俺にください。お願いします」

頭を下げたまま、彰人は続ける。

「必ず幸せにすると確約はできませんが、二人で幸せになれるように努力いたします」
まなみの両親は突然のことにびっくりしたのか、何も言わなかった。けれど、しばらくすると隆俊が言う。

「ああ、うん。分かつたから顔を上げてくれないか、彰人君」

顔を上げた彰人の目に、苦笑いを浮かべている二人の姿が飛び込んできた。

「びっくりだよ。そんなに直球で来るとは予想外だった」

彰人の口元にも苦笑いが浮かぶ。

「いえ、なんだかお二人を相手にするなら、下手に策を弄するより、直球の方がいいよな気がしまして」

「そうだね。その通りだと思う」

隆俊はハハハと笑った後、急にその笑みを消した。沙耶子が何も言わないのは、判断を夫に委ねているからだろう。

「あの子にも言っただけど、僕たちはまなみの意思を尊重している。だから、あの子が君を選んだのなら、反対する気はないんだ」

「ありがとうございます」

「ただね、危惧はしている。君の背後にあるものの大きさに、あの子が潰されてしまうのではないかと。そのせいで、あの子は一度とても深く傷ついたから」

十年前のことを思い出し、彰人は唇を噛み締めた。

「存じています。あの時のことは、俺も無関係ではありませんから……」

「そうだったね。だからこそ君にも分かるだろう。どんなに守ろうとしても、必ずあの子を傷つけるものが現れる。君がその全てを防いで、あの子を守りきることは不可能だ」

「……はい」

彰人は頷く。それが分かっているからこそ、『必ず幸せにすると確約はできません』と言ったのだ。

自分だけに関係することなら、全て排除して幸せにしようと言えただろう。けれど、そこに佐伯家という要素が入り込んだら、必ず排除できるという保証はなくなる。佐伯の名が持つ重さは、個人の幸福など簡単に吹っ飛ばしてしまえるのだ。

「だから僕らが君に望むのは、あの子をただ危険や悪意から守るだけでなく、いざという時にあの子がそれを乗り越えていけるよう、寄り添うことだ。その手と心を、あの子から離さないでくれ。君の属する世界であの子が頼れるのは、それだけなのだから」

隆俊の目が彰人をまっすぐに射抜く。

「それを約束してくれるなら、僕たちは君に娘を託そう。どう？ できるかい？」

彰人は隆俊の目をしっかりと見ながら頷いた。

「はい。お約束します」

その彰人の言葉を聞いたとたん、隆俊の顔にいつもの笑みが戻る。

「そう。では、あの子をよろしく頼むね、彰人君」

「はい」

「はいはい。この話はここでおしまい。あの子のいないところで、これ以上はダメよ」

沙耶子が口を挟む。確かに、この話は本来まなみも交えてすべきだろう。

彰人はにっこりと笑った。

「では、この話はまた日を改めて」

そう言って、ソファに腰を下ろす。すると、隆俊が急に悪戯っぽく笑った。

「だけど、実際に結婚するまでは大変だろうな、君も。三条家の男性は手ごわいよ？
口では認めたと言いながらも何かとチクチクついてきて、こつちを試そうとするからね」

彰人の脳裏に、まなみ曰く「過保護な従兄弟」である二人の顔が浮かんだ。

「認めるどころか、反対してますよ」

そう言って、彰人は思わず笑ってしまう。

「あの二人か。あの子たちも、頑固で責任感が強いから……。それにお義父さんやお義見さんも、多分いざとなったら洪ると思うよ。僕の時もそうだった」

當時を思い出したのだろう、隆俊がクスクス笑った。

「ああ、そうだ。君にいい手を教えてあげよう。僕も使った手だ」

「いい手？」

「そう。女性陣を全て味方につけるといい。君にも分かんと思うけど、男というものは自分が選んだ女性には弱いんだ。あの子家の男たちも例外じゃない。だから三条家の全ての女性を味方につけるのが、男性陣を黙らせる一番の早道だ」

それを聞いた沙耶子が笑い出した。

「この人は本当にそうしたのよ。うちの母や姉だけじゃなくて、美代子おはさまや七緒さんまで味方につけたの。そうなると、男性陣は折れるしかなくてね。この人を認めざるを得なくなったのよ」

彰人も笑みを浮かべた。簡単に想像がつく光景だ。確かに三条家の男性も佐伯家の男性も、どんなに会社で威張ってしようと、伴侶には頭が上がらないのだ。

「それはいいですね、俺もそうすることにします」

彰人はにっこり笑った。

それからしばらく和やかな話題が続き、その後、彰人と隆俊が仕事の話で盛り上がった時に、美代子が戻ってきた。

「お待たせしてごめんなさい。電話がかかってきたから、つい長話しちゃって……」

そこまで言うてから、美代子は応接室を見回して首を傾げた。

「あら、まなみちゃんは？ 先に戻ってきているはずなんだけど」

彰人たち三人は顔を見合わせる。

「いいえ、お祖母さん、まなみは戻ってきていません。別れたのはどのくらい前ですか？」

「十五分くらい前よ」

「十五分——」

とつくに戻ってきていなければおかしい時間だ。

「まさか、あの子迷子になつてるとか？」

「いや、それはないよ。今までこの屋敷には何度も来ているだろう？」

「でも、まだ幼い頃だったし……」

沙耶子と隆俊の会話を聞きながら、彰人はソファから立ち上がった。

「探しに行つてきます」

彰人は、まず母親の部屋がある三階を見回った。だが、そこにまなみの姿はなかった。次に二階を見て回る。だが、やはりどこにも姿は見えない。

最初はそれほど深刻に考えていなかった彰人だが、だんだん不安になつてくる。

「……三階の防犯カメラを調べてみるか」

そう言つて一階に下りた彰人の耳に、不意に鈴の音が聞こえた。

——チリン。

その音を彰人はよく知っていた。大学を卒業する年になるまで、この屋敷のあちこちで聞いていた音だったからだ。

「……マナ？」

それは祖母の飼っていた猫——マナの首輪に付いていた鈴の音だった。走るたびにチ

リンチリンと音を立てる鈴は、どこにいてもマナの所在を知らせてくれたのである。

マナが亡くなり、その音が途絶えて久しい。

だが、この館に帰省しており、彰人の耳にはふとした拍子に、鈴の音が聞こえることがあった。それは彼に、いつも愛しさと喪失感を同時にもたらす。

美代子は「マーちゃんの魂は、まだこの屋敷で以前と変わらない日常を送っているよ」と言つて、月命日にマナの好物を供えるのを忘れない。

彰人も時々鈴の音を聞くので、そういうこともあるのかと漠然と思つていたのだが、今聞こえてくる音は、いつになくはつきり聞こえる気がした。

——チリン、チリン。

音のする方を見た彰人の目に、ゆらめく尻尾が見えた。その色はマナと同じ青灰色だった。

「マナ？」

彰人の呼びかけに、鈴の音がチリンと応じる。そして、尻尾が廊下の方へ消えた。その先には、裏庭がある。

チリンチリンと音が大きくなる。まるでこつちへ来いと言つているようだ。

「まなみがいる場所を教えてくださいのかい？」

なんとなくそんな気がして、彰人は裏庭に向かった。

低木や花々が整然と植えられている前庭と違って、裏庭はシンプルながら趣がある造りになっている。大きな木々がそれをぐるりと囲み、塀の外から屋敷の中が見えないように隠してくれていた。

そんな裏庭の一角に、小さな墓がある。墓の周囲には小さな花が植えられていて、毎日のように手入れされていた。

小さな墓石に彫られた名前は「マナ」。そう、これは猫のマナの墓だった。

その墓の前に、一人の女性がたずんでいる。

「まなみ」

まなみが振り返り、彰人の姿を認めて笑顔になる。

「あ、彰人さん！」

「帰ってこないから、迷子になっているのかと心配したよ」

「ごめんさい」

そう素直に謝ってから、まなみは口を尖らせた。

「でも、さすがの私でも、何度も来たことがある屋敷で迷ったりしませんってば。鈴の音とマーちゃんらしき尻尾を追いかけてたら、ここまで来ちゃって」

「猫の尻尾……」

「うん、あれは絶対マーちゃんの尻尾でした！」

そう言って、まなみはお墓を振り返る。

「ここ、マーちゃんのお墓なんですね。もしかして、お参りに来いってことだったのかな？ ……あのね、マーちゃんは、私がこの屋敷の裏門の外で拾った猫なんです」

「まなみが？」

彰人は目を見張る。それから、かつて祖母が言っていた言葉を思い出し、納得して頷いた。

「だからマナという名前なのか」

「そうだ。以前、美代子は拾ってくれた子の名前から取ったと言っていた。」

——ああ、こんなところでも、君と俺は繋がっていたんだな。

彰人は微笑んだ。

まなみは頷いたが、すぐに顔を曇らせる。

「前はよく会いに来てたんですけど、十年前のことがあってから、あまりこの屋敷にも来なくなっちゃって、マーちゃんともそれっきり……」

「そうか……」

関係者の誰もが傷ついた、あの十年前の出来事。あれがなければ彰人とまなみは、偶然この屋敷でばったり出会っていたのだろうか？

今となつては分からない。ただ、過去を通して、色々な人たちを通じて、自分たちは繋がっている。そのことに、今はただ感謝したい気持ちだった。

「きつとマナは、自分にも挨拶しろって言いたかつたんだろうな」

もう鈴の音は聞こえてこない。墓参りをしてもらって、マナは満足したのかもしれない。

「そうかもしれませんね……」

しみじみと言つてから、まなみはふと顔を上げて彰人の手を取り、もう片方の手で裏門を指差した。

「彰人さん、あそこ。あの裏門の近くを散歩してた時に、猫の鳴き声が聞こえたんですよ」

「そうか。よく見つけたね」

彰人はその手を握り返して、説明するまなみを愛おしそうに見下ろした。

「本当に偶然なんですけど、見つけられてよかったです。段ボールに入れたまま放置されて、弱っていたんですよ。でも、タオルがいっぱい敷いてあったので、多分、元の飼い主も捨てたくて捨てたんじゃないって思えるのが救いです」

「マナにとって救いなのは、まなみに拾われて、命を助けられたことだと思うよ」

「違います」

まなみはそう言つて、笑いながら彰人を見上げた。

「美代子おばあちゃんに引き取られて、彰人さんにうんと可愛がつてもらったのが、一番の救いだったんです」

「そうかな。……うん、そうだといいいね」

「絶対そうです」

彰人とまなみは互いの顔を見て笑みを交わすと、どちらともなくマナの墓を見下ろした。

「今度また二人でここに来ようね」

「はい」

マナの墓の前で手を握り合う二人の傍を、爽やかな風が通り過ぎていった。

ガ
ー
ル
ズ
ト
ー
ク

ある日の昼休み。ランチを少し早く終えた私、水沢さん、川西さん、浅岡さんの四人組は、休憩室でコーヒーを啜っていた。

たわいもない話をしていたら、不意に水沢さんが「そういえばさ」と前置きしてから、こんなことを言い出す。

「私さあ、上条ちゃんが課長と付き合っていると知ってから、ずっと聞きたかったことがあるんだよねえ」

私はキョトンとして首を傾げた。

「私にですか？」

「もちろん、上条ちゃんによ。今や仁科課長の婚約者として会社中に知られている上条ちゃんにね」

「ハハハ」

私は乾いた笑いを浮かべた。

私が仁科課長——本名佐伯彰人さんと婚約して、それを彰人さんに会社で暴露されてから数ヶ月が経つ。未だに社員の間で話題にのぼることが多いらしく、私の名前や所属部署も完全に知れ渡っていた。

自分は相手を知らないのに、相手は私を知っているということが多くて、さすがにちよつと辟易している。相手は私を知っているということが多くて、さすがに

人の噂も七十五日と言われているのに、それを過ぎても噂され続けてるってどうなの？

でも、これはある意味仕方ないことかもしれない。それだけ彰人さんはこの会社の中で特別な存在なのだ。

「これは、この会社の中では上条ちゃんにしか聞けないことなの」

紙コップの中のコーヒーを一気に飲み干した水沢さんが、真剣な眼差しを私に向けた。え、何？ 聞きたいことって、水沢さんがこんなに真剣になるほど重要なことなの？ 思わず居住まいを正す私だったが、水沢さんが続けた言葉は意外なものだった。

「課長のアレってどうなの？ 大きいの？ それとも小さいの？」

ブブ——ッ！